総合型地域スポーツクラブの設立及び小学校・中学校・高校の一貫指導、障害者柔道支援に関する研究

~A study about the establishment of the overall pattern area sports club, the consistency guidance of an elementary school/a junior high school/ the senior high school and the handicapped person judo support~

プロジェクト代表者：野瀬清喜
Nose Seiki

1　研究目的

本研究では、(1)総合型地域スポーツクラブ設立に関する研究、(2)中学校・高等学校・大学における柔道の一貫指導(スポーツエリート養成)、(3)視覚障害者柔道の支援に関する研究の３つを主な柱として研究を行った。

現在、我が国の社会は少子高齢化・核家族化が進み、地域社会の連携や教育力の低下が大きな問題とされ、この問題が青少年から高齢者までの健康問題とも深く関係しているとされている。このことから(1)の研究では、地域に開かれた大学を目指す埼玉大学が、地域貢献活動を充実し、子どもたちの健康づくりと家族の交流の場を設けるため、様々な施策と地域住民の拠点となる活動を推進することを目的とした。次に日本オリンピック委員会(JOC)では、重点的な研究目標として「タレントの早期発掘」「一貫指導」を行っていて、埼玉県は福岡県と共に JOC より強化指定を受け、過去に４年間モデル事業の補助金を受け少年柔道教室を開催してきた。(2)の研究ではこの経験を生かし、本学でも「少年柔道教室(キッズ柔道)」を開催し、地域住民のエリアサービスを行うと共に、有望選手の早期発掘と一貫指導を行い、6 年後のロンドンオリンピックの代表選手を育成し、大学のスポーツ活性化に貢献することを目的とした。最後に(3)の障害者への支援研究は、柔道ルネッサンス委員会でも活動している内容をから、学生たちが障害者スポーツのあり方や問題点、介助の仕方について認識できる資料作りを行うと共に、障害者も参加できるスポーツクラブの推進を目的とした。

2　研究成果

(1) 総合型地域スポーツクラブ設立に関する研究

「さいたまキッズ柔道クラブ」を設立し、計 61 名の小学生が入会した。川口 25 名(男 17 女 8)、新座 5 名(男 3 女 2)、戸田 14 名(男 10 女 4)、浦和 17 名(男 17)。活動期間は 5/20～12/16 までの 17 回、参加した延べ人数は 368 人に及び、1 回の平均人数は 21.6 人であった。これらの活動は、保護者 61 名、指導者 25 名とともに 1 年間継続し、少年柔道選手の体力･運動能力の特性、少年柔道指導法、保護者の要望などの抽出をして様々な知見を得ることができた。

(2) 中学校・高等学校・大学における柔道の一貫指導(スポーツエリート養成)

本研究者は過去 10 年間、淑徳中学校高等学校・淑徳大学の協力を得て、周辺の中学校、高校に呼びかけ毎週、女子柔道の合同練習会と指導法の研究会を開催してきた。この活動から、多くのスポーツエリートを輩出した。現在、世界選手権等で活躍中の選手 4 名も中学校、高等学校の時代から練習会に参加してきた選手たちである。

(3) 視覚障害者柔道の支援に関する研究

本研究者は、2002 年に川越市議会議員牛窪多喜男氏(視覚障害者・パラリンピック柔道 2 回

優勝)より要請を受けて、2 名の視覚障害者柔道選手の指導を続けてきた。この 2 名、加藤祐司・広瀬誠は、アテネパラリンピックで銀メダルを獲得した。現在でも加藤祐司と平井孝明(筑波大学付属盲学校・世界大会優勝)の 2 名が、土曜日を中心に練習に参加している。

3　今後の課題

(1) 総合型地域スポーツクラブ設立に関する研究

本研究で得た様々な知見をもとに、今後もこの活動を継続し、さらに中学生を対象とした「さいたまユース柔道クラブ」を設立し、引き続き地域貢献及び体力向上などのエリアサービスを行うつもりである。将来的には、外部資金導入による体育施設の改修と「さいたまスポーツクラブ（サリー)」設立にこの活動を移行することも考えている。

(2) 中学校・高等学校・大学における柔道の一貫指導(スポーツエリート養成)

10 年間の研究において、今年度世界選手権大会に 3 名、ユニバーシアード大会に 1 名の代表選手を輩出することができた。今後は、2008 年北京五輪、さらには 2012 年ロンドン五輪代表を育てるシステムを構築することが課題である。

(3) 視覚障害者柔道の支援に関する研究

現在までに 2 名の選手がパラリンピックや様々な世界大会で成績を残している。今後は視覚障害者の全日本強化合宿を招致するなど、2008 年北京パラリンピック、2012 年ロンドンパラリンピックの指導法の開発と支援を行っていきたい。

4　発表論文リスト

野瀬清喜 :「柔道競技向上のための実践的研究」『埼玉大学紀要教育学部』第 56 巻、第 1 号、PP.185-195、2007 年 3 月

三浦真依、野瀬清喜他 3 名 :「武道の伝統を重視した学校体育の柔道指導法」『埼玉武道学研究』第 6 号、PP.1-13、2007 年 3 月

野瀬清喜 :「柔道の学習と学びの順序」『体育科教育』大修館書店、5 月号、PP.52-55、2007 年 4 月

野瀬清喜他 5 名 :「柔道競技に及ぼすマスメディアの影響」『講道館柔道科学研究紀要』講道館、第 11 輯、2007 年 5 月発刊

高橋健夫、永島惇正、野瀬清喜他 12 名 :「新しい中学校体育授業の展開」ニチブン、2007 年 11 月発刊予定、編集中